

粘土素材と遊びとの関係から育まれる子どもの造形表現

齋 藤 正 人

Nurturing Children's Artistic Expression in the Relationship between the Clay Material and Play

Masato SAITO

要 旨

本稿では、子どもの遊びを豊かに広げるための造形素材として、土粘土に注目した。実際に粘土を用いた2つの造形活動を実施し、粘土素材と遊びとの関係について、活動する子どもの姿から明らかにすることを試みた。活動の実践からは、粘土の特性である可塑性と粘着性を活かして遊びを生み出す姿が見られた。また、造形活動の中心に遊びがあることの確認ができた。それらを踏まえ、粘土遊びから育まれる子どもの造形表現についてまとめた。明らかになったことは、粘土遊びを通して感じる驚きや喜びといった心情が、粘土を扱う行為をより活発にさせていたことである。それは、驚きや喜びを手を通して外に表そうとする表現の始まりとも考えられる。幼児期の造形表現とは、手で作るだけでなく豊かな心情を育むことにより可能になる。つまり、素材体験を通した内面の表出と身体的な表出が一体となり、造形表現を育んでいくということである。したがって、子どもが「こころ」で感じたことを、「手」を通して表そうとする意欲を育む活動環境が重要であるといえよう。

キーワード：造形素材、粘土、遊び、造形表現、子ども

1. はじめに

子どもが自由に遊ぶ様子を観察していると、その遊びの中に造形的な要素を見出すことができる。例えば、園庭の石を丸く並べたり、木の実をつぶした汁で跡をつけるなどの行為がそれである。それらの行為は、石を並べて何かに見立てる立体表現や、木の実の汁で描く平面表現へとつながる可能性がある。このような遊びの中にみられる造形的な要素を、造形表現として幼児期に育んでいくことは非常に重要なことである。しかし、子どもにとっては造形への意識が働いておらず、楽しい行為を求め好奇心を満足させているだけのように見える。大場が「子どもは生活のなかで、ここまですぐ遊びで、ここまですぐ仕事だというように区別がつかない」（大場, 1996, p. 40）と述べているように、子どもは自由遊びと造形活動との区別をしていないものと思われる。

このような造形的な遊びの大半は、「もの」との関わりを中心に広がっていくと筆者は考えている。ここでの「もの」とは、身近にある自然の素材や日用品などのことである。子どもは、身近な物的環境の中で素材を色別に並べたり、叩いて音を出したり、匂いを嗅いだり、破る感触を楽しんだりと五感を使って素材自体を試すことがある。そうすることにより、素材の特性に気づ

き、その特性を活かした遊びを生み出していくのである。このことは、先行研究において、造形活動における素材体験の重要性として報告している(齋藤,2014)。その中では、素材をもてあそぶ行為と造形活動が一体となった活動過程に、造形表現は育まれていくとしている。つまり、造形活動における素材遊びへの広がり、豊かな造形表現を展開させるということである。

これらのことを踏まえ、造形素材と子どもの遊びとの関係について考えてみたい。今回は、造形素材としての粘土に注目する。粘土を選択する理由は、直接「手」で触れ、特別な用具を必要としない点から、幅広い年齢に対応可能なためである。また、他の素材と比較して感覚的に扱える粘土は、遊びにつながりやすいと考えられる。

本稿では、粘土素材と子どもの遊びとの関係を、筆者らが実践した2つの造形活動からみていくことにする。粘土の持つ特性がどのように遊びを生み出し、子どもがどのように粘土に関わっているのかを観察する。ここでは、子どもが作品として意識し形作る前の「粘土遊びの段階」を中心にみていくことにする。

粘土造形に関する代表的な先行研究としては、中川織江の粘土遊びを心理学的に研究したものがある(中川,2001)。その中では、子どもの粘土造形における「作品形態」を分類し、そこに至るまでの粘土の「操作過程」の操作項目の一覧が示されている。中川は、「1歳から6歳までの子どもが粘土に接触する段階から作品化に至るまで」を研究対象とし、「作品形態」と「操作過程」の両者の関係性の分析によって、粘土造形の発達過程を明らかにしている。しかし、粘土造形の発達過程と造形表現とを関連づける研究については、十分なされているとはいえない。そこで本稿では、粘土遊びの中にみられる造形的な要素(行為)に注目し、粘土遊びから育まれる造形表現について明らかにしていくことにする。

2. 粘土素材の特性

子どもの造形活動に使われる粘土には、土粘土、紙粘土、油粘土、小麦粉粘土、樹脂粘土などがある。本稿では、その中でも扱いの自由度が高い土粘土(以下、粘土)についてみていくことにする。まず、粘土特有の性質であるが、その1つは可塑性である。粘土を握ると一瞬で形となり一定時間その形を留めることができる。この性質は、子どもが考えたことを自在に形にすることができるため、特別な技術を必要とせず即興的な活動を可能にしている。また、粘土を触りながら偶然できた形を何かに見立てるなど、そこから発想を膨らませることもできる。この性質が十分に発揮される粘土の硬さは、一般的に「耳たぶくらい」といわれている。子どもの粘土遊びに適切な粘土の硬さを調べた実験によると、「破断力が $200 \times 10^4 \text{ dyne/cm}^2$ 、すなわち『耳たぶ』の固さ程度」(中川,2001, p. 34)との結果がある。ただし、身体機能の発達や粘土遊び経験の有無などの個人差によって、扱いやすい粘土の硬さは違ってくものと考えられる。

次にあげる性質は、粘着性である。粘土は接着剤を使わず思ったところに感覚的に貼りつけることができる。この性質は、貼りつけたり切り離したりが容易であるため、イメージに合わせて繰り返し作り直すことを可能にしている。また、子どもがそれぞれに作ったものを合体させることが容易にできるため、子ども同士で協働した遊びへも広がりやすい。

粘土素材は、この可塑性と粘着性の2つの性質を有していることにより、手で直接触れて形作ることができる。この点においては、用具を用いる必要がある他の素材との違いが明確である。紙やビニールの素材であれば、切るためのハサミや貼るための接着剤が必要であり、手のみで形作することは難しいだろう。そう考えれば、手を道具にして扱う粘土であるからこそ、握力の未発

達な幼児に与える粘土の硬さ調整は重要といえる。しかし、身近に計測する機材がないため、硬さ調整は造形活動を行う指導者の経験によるところが実情である。

また、他の素材と比較して粘土素材の魅力と考えられるのは、「しっとり、つるつる、ぐにゅぐにゅ」とした触感ではないだろうか。この手触り感覚は、素材に対する子どもの期待感を高め、遊びへの好奇心を引き出しやすい。さらに、粘土を「叩く、押しつける、ちぎる」などしながら感触のおもしろさを味わい、次第にその行為が遊びへとつながっていくことも粘土ならではの良さといえるだろう。粘土の触感はそれだけではない。水分量の調節により粘土の状態は様々に変化する。例えば、水を多く加えるとペースト状の素材に変化する。そのことにより可塑性と粘着性は失われるが、指を使って泥絵を描くなど「ぬるぬる」とした感触を楽しむ遊びに展開する。それとは逆に、乾燥させ砕いてすりつぶすとパウダー状の素材にもなる。これは紙の上に粘土パウダーを砂絵のように撒いて楽しむことができる。

さらに、粘土が他の素材と最も違うところは、窯で焼成することで陶となり、恒久的な物質に変化するところである。焼成のプロセスを経れば、子どもの粘土造形を形に残すことが可能になる。

このように粘土素材は、固有の性質と魅力を兼ね備え、他の素材と比較しても特別な技術や用具を要しないという点から、子どもの遊びを広げられる素材として大いに活用できるだろう。

3. 粘土素材を用いた造形活動の実践から

本研究は、粘土素材と遊びとの関係から育まれる造形表現について明らかにすることが目的である。そこで、子どもが粘土を「握る、ちぎる、叩く、丸める」などの行為から、どのように遊びが広がっていくのかに注目する。そして、子どもが粘土を様々に試す中で粘土の特徴に気づき、粘土のおもしろさを体験することにより、遊びへの欲求を高めていることを確認したい。2つの実践では、まず素材体験を促し、そこから遊びが広がっていく様子を観察する。そして、遊びの中から表現がどのように育まれていくのかを、実際の子どもの行動からみていきたい。

今回は、2ヶ所の施設で粘土を用いた造形活動を実施した。A保育園（岐阜市）では、個々の活動として設定し、子ども一人ひとりが粘土に向き合う時間を大切にしたい。B幼稚園（岐阜市）では、子ども同士の関わりも想定し、粘土を用いた協働（遊び）を企図した。2つの活動は、子どもが粘土に慣れ親しむことを優先し、特定のイメージに誘導しないよう声かけ等に配慮した。最終的には、具体的な形やテーマで活動をまとめているが、何ができたかという「結果」より、どう作ったかといった「過程」を大事にしている。しかし、具体的な形を残そうとする大人の「思い」が伝わっていたことも事実であり、十分に子どもの遊びを引き出せたかどうかは、さらに検証の必要があると思われる。

なお、A保育園、B幼稚園の園児および保護者には、園を通じて本研究の目的を説明し、記録資料は研究以外で使用しない旨を伝え、写真撮影の許可と写真使用への同意を得ている。

3-1. A保育園の場合（図1）

実施日は平成25年7月26日。対象は園児42名（4歳：男10・女9、5歳：男13・女10）。実践者はクラス担任の保育士3名と筆者である。活動時間は45分。素材は粘土1人2kg、硬さは「耳たぶ」程度に調整した。他に粘土用具（ヘラ、カンナ、切糸）と粘土に模様をつける型押し用具を用意した。活動内容は、粘土の触感を味わい粘土遊びを楽しむこと。作ったものは電気炉で焼

成し園庭に飾る目的を伝えているが、始まりの段階で具体的な形のイメージは与えていない。今回は、造形技法の習得や作品の完成度に重点を置いていないため、作り方の説明や参考作品を示すことも行っていない。

A 保育園の場合は、個々の活動として設定しており、一人ひとりが粘土に向き合う時間を大切にした。まず、工作台にそれぞれのスペースを確保し、同じ分量の粘土を配布。粘土を練ることから始めたが、普段使い慣れている油粘土よりも硬く、子どもにとっては多少の抵抗感があった。しかし、その粘土の硬さによる抵抗感は、体重を乗せて押しつぶすなど全身を使って粘土を練る行為を引き出した（図2）。手先だけでは形を変えられない状況が、結果としては粘土に向かう意欲につながったようである。粘土の扱いに慣れると、粘土を「ちぎって並べる、細長く丸める」など、「変な感じだ。おもしろい」と話しながら素材を試す行為がみられた（図3）。粘土を叩き大きな音が出ることに気づき「いい音だ。気持ちいい」と、みんなで叩きはじめる様子もあった（図4）。また、粘土用具との関わりも粘土遊びへの興味や好奇心を引き出すことにつながった。例えば、スプーンを使って粘土が光るまで磨く行為（図5）。カンナを使って粘土を薄く削り出す行為。型押しの用具を使って水玉模様を粘土に押し当てる行為など、手だけではなく積極的な用具の活用もみられた。

このように、子どもたちが粘土素材を様々に試す体験をした後、保育士から「みんなはこの粘土で何を作る」「園庭に何があったらいい」といった言葉が投げかけられた。子どもからは、人気キャラクターや動物、乗り物などが次々に挙げられたが、「卒園してからもずっと飾ってあるよ」との言葉に深く考える姿があった。「保育園の名前」はどうかとの意見に続けて「保育園の形」という意見が出た。保育園の形というのは、園のシンボル「わかばマーク」のことである。「それがいい」ということになり、全員が「わかばマーク」を作る流れができた。その後、それぞれがイメージする「わかば」作りを行った（図6）。子どもたちは、活動の初めに粘土を様々に試し粘土の可塑性と粘着性を体感しているため、その特性を活かした造形が直ぐにでき上がっていった（図7）。また、型押し用具を使って模様を押し当てるなどの経験も、用具の効果を活かす活動につながっていった。

「わかば」作りは20分くらいで一段落したが、子どもにとってはここからの時間も遊びの態勢であったといえる。例えば、完成した作品をカンナで形がなくなるまで削る（図8）。粘土を切り取っては、また貼りつけることを繰り返し元の形を変える（図9）。活動の最後に見られたのは、音を出しながら粘土を叩き、薄く伸ばして作品を破壊する行為であった。全員ではなかったが、作っては壊し、また作るといった繰り返し行動が多くみられた。しかし、壊したまま終わる子どもはおらず、最後は形を作って「できた」と見せにくる姿があった。

このように形作られた「わかば」は、その後、大学の施設で乾燥・素焼・施釉・本焼のプロセスを経て、子どもたちの元に届けられた。



図1 A保育園での活動風景



図2 全身で粘土を練る姿



図3 粘土の重さを確認する姿



図4 粘土を叩いて音を出す姿



図5 粘土をスプーンで磨く姿



図6 「わかば」の形を作る姿



図7 可塑性と粘着性を活かした造形



図8 粘土をカンナで削る姿



図9 完成した作品を壊す姿

3-2. B幼稚園の場合(図10)

実施日は平成26年8月2日。対象は園児38名(男21・女17)、小学生7名(男3・女4)、保護者31名。実践者は岐阜聖徳学園大学短期大学部齋藤ゼミ生11名。活動時間は90分。素材は粘土1人2kg程度、硬さは「耳たぶ」程度に調整した。活動内容は「海の世界を作ろう」をテーマとし、海の生物や空想した海の世界を粘土で表現するというものである。

まずは、素材体験を通して粘土に慣れてもらうため、「粘土と友だちになろう」といった声かけから始めた。「粘土と握手できるかな」といった学生の声かけに応じて、子どもたちは小さな手で粘土を力いっぱい握った。そしてゆっくり手を開くと、可塑性により自分の手と指の跡が粘土に残る。その握った形が何に見えるかと問いかけるなど、少しずつ粘土への興味を引き出していった。次第に子どもたちが粘土に慣れ、「ちぎって丸める」(図11)、「長いひもに伸ばす」(図12)などの行為が見られるようになった。このような行為は、親子から隣の友だちへと連鎖し、粘土で玉を作る競争や粘土を細長くつなげる遊びに展開し、子ども同士のコミュニケーションがみられるようになった。

参加者が粘土に慣れ素材の魅力を味わったことを確認し、今回の活動のテーマである海の世界作りに入っていた。学生が海の背景（図13）を準備し、そこに子どもたちが作った海の生物を配置する。ここでは、参加した全員で海の世界を創り上げていく中で、他者の行為や考えに共感し、同じ時間と空間を共有できる活動環境を大切にしたい。実際に見られた事例として、一人の子どもが海の生物を作ると、他の子どもがそこにストーリーを考え関連するものを作り始める。そして、ストーリーを展開させながら二人だけの世界が生まれる様子が観察された。さらにそこに数名が加わり、子どもだけで遊びのルールを共有し、特別な遊び場ができていった。そこには「もの」だけではなく、「ひと」と関わることから造形的な遊びの広がりをみることができた。

海の生物作りが一段落すると、完成した作品をおもちゃに見立て「ごっこ遊び」をしたり、自分たちの作った海の世界に寝転んで空想の海を泳ぐ仕草をするなどの遊びもみられた（図14）。



図10 B幼稚園での活動風景



図11 粘土をちぎって丸める姿



図12 粘土で長いひもを作る姿



図13 学生が製作した竜宮城



図14 海の世界に入り込んだ姿



図15 子ども同士で交流する姿

3-3. 粘土素材と子どもの遊びとの関係

粘土素材を用いた2つの活動からは、子どもの造形活動の中心に遊びがあることの確認ができた。子どもは、粘土を「ちぎる、押しつぶす、丸める、並べる、転がす、貼りつける」などの扱い方を試すことを通して、粘土の特性を活かした遊びを生み出し楽しんでいた。特に粘土特有の性質である可塑性が、子どもの遊びを豊かに広げることになっていた。

そして、その粘土遊びの中に造形的な要素が生まれる瞬間を確認することができた。具体的には、図11、図12で示したような作品となる以前の「粘土遊びの段階」に、そのような造形の始まりとみられる行為があった。A児「おだんど、おだんど」といいながら粘土を大量に丸める姿（図11）。「いっぱい、おだんど」と話しながら手を動かし、「おだんど」を粘土板の縁に沿って並べたり、上に積み重ねる行為へと展開した。また、B児「にょろにょろ、もっと」と話しながら

細長く丸めた粘土をつなげていく姿（図12）。この後、「ぼくの方が長いよ」と兄弟で粘土の長さを競う遊びに展開した。そこへ他の子どもが「線路みたい」といいながら、同じように粘土を細長くつなげる行為がみられた。このことから、遊ぶ中での発話と手の行為の関係も遊びを変化させるきっかけとなっていたことがわかった。言葉の発達度合いにもよるが、感じたことや思ったことを言葉で表すことと身体的な行為とは関係があるといえよう。その活動中にみられた言葉と行為は、子どもが心情を表現する手段となっていた。

もう1点、粘土特有の触感が、素材に対する期待感を高め遊びへの好奇心を引き出していたことについて考えてみたい。具体的には、「しっとり、ぺたぺた」とした触感の粘土を、それ自体がおもちゃであるかのように扱う子どもの姿である（図2）。初めは粘土の触感を気持ちわるがっていたC児が、粘土を叩くと保育室に大きな音が響いた（図4）。その音に反応し、次第に全員で粘土を叩く遊びに展開する様子が見られた。ここでも楽しいという気持ちは、「どん、どん、どん」「ぼくの音の方が大きいぞ」といった発話とともに、次第に行為が活発になる様子を確認することができた。粘土を扱う自分の行為を言葉に表すことにより、身体的表出では表しきれない部分を言葉で補っているようにも感じた。

次に、A保育園でみられた、作品が完成した段階からの子どもの行動に注目したい。それは、粘土を叩く音を楽しみながら掌で粘土を薄く伸ばす姿である。一見すると作品を破壊する行為にもみえるが、粘土を自在に扱う楽しさを優先することによる遊びの1つと考えられる。子どもにとっては、粘土を思ったように「削る、丸める、叩く」といった行為が重要であって、作品を完成させることは活動の目的ではなかったのである。中川は、「作品がうまくつくれたかどうかの結果や評価、技術的なことよりも、遊んでいるプロセスそのものが楽しく、自分で感じて考えた気持ちを率直に表現できていることが大切」（中川, 2005, p. 67）と述べている。作ることと壊すことが一体となった遊びの過程が、子どもの満足感や充足感を満たしていたのである。子どもにとっては、創作も破壊も遊びであることに違いはないのであろう。

B幼稚園の場合では、机を使用せず子どもたちが好きな場所に移動できる活動環境であった。そのこともあり、活動中から他者を意識し他者の作り出すものや考え方に共感する姿勢を見せたことに注目したい。他者が考えた遊びのおもしろさに共感し、また自分が発見したおもしろさを他者に伝えるなどの行動がみられた（図15）。ここで大切なことは、友だちと協働して作ったり、遊びのルールを共有することにより、「もの」（粘土）との関わりを通して「ひと」（友だちや親）と関わることを楽しんでいたということである。

4. 粘土遊びから見られた子どもの造形表現

2つの活動の実践では、粘土を様々に試す行為の中に「心を動かしている瞬間」があったことを指摘しておきたい。今回の実践からは、A保育園で見られた粘土を叩き音を出して楽しむ行為（図4）に、子どもの心が動く瞬間があった。「片手で叩く、両手で叩く、みんなで叩く」など、叩き方や加える力を変えながら遊ぶ中に、「いい音だな、冷たくて気持ちいいな」と感じることで心が動いていた。そのことは、活動中の子どもの発話により確かめることができた。また、B幼稚園でみられた粘土を「ちぎって丸める、並べる、細長くつなげる」行為（図11、図12）からは、「不思議な手触りだな、自在に形が変わっておもしろいな」と手先だけではなく心も動かすことになっていた。このことも、活動中の発話と連動した行為の変化により確かめることができた。事例の中では、作品が破壊され形が残らないこともあったが、その時の楽しかった思いや感

動は、子どもの心の中に経験として積み重ねられ、次の活動への意欲としてつながっていた。粘土をちぎって並べることを楽しいと感じて繰り返す行為、手で握った触感を不思議に感じて繰り返す行為など、粘土という素材をもてあそぶ中から「やってみたい」という意欲は育まれていったのである。

このようなことから、子どもが素材体験の中で感じる「すごいな。おもしろいな。どうしてかな」といった心の状態と手を動かし形に表す行為は一体であることがわかった。また、身体的な表出とともに、言葉による心情の表出も重要な造形表現の要素であったといえる。

このように考えると、素材遊びの段階での子どもの驚きや喜びといった心情は、「表現の芽」といえるのではないだろうか。つまりそれは、感じたことや気になることを「手」を通して表したいという表現の始まりである。素材を手で試すことにより、「不思議だ。おもしろい」と心が動く。心が動くことにより、さらに手の行為が活発になっていく。この経験の繰り返しによって、子どもの内面が形に表される。それが造形素材と遊びとの関係から育まれる造形表現なのではないだろうか。

ここに、子どもの手による行為と心を動かすことを可能にする活動環境の重要性が見えてきた。造形活動では、子どもが「こころ」で感じたことや考えたことを、「手」を通して表そうとする意欲を育むことが大切なのである。そして、子どもの造形表現を育んでいくためには、活動過程での子どもの手と心の動きを「表現の芽」としてすくい上げる保育者の目が不可欠であるといえよう。

5. まとめ

子どもの造形表現とは、美術的基準で評価することはできない。もしそうしたならば、造形指導に作品中心主義の考えが入り込むことになる。そこに、子どもの心身が解放された自由奔放な表現を見ることはできなくなってしまう。作品の完成度を評価の基準にしてしまえば、幼児期に最も大切にしたい「子どもらしさ」が失われてしまうことになる。さらに、この時期に特有の表現の発達過程をゆがめることにもなってしまいうだろう。

パブロ・ピカソは「子供のように描けるまで一生かかった」（飯田, 2000, p. 282）と語ったといわれている。このエピソードは、子どものころの感性や子どもの描いた絵からも、少なからず影響を受けていたことがうかがえる。ピカソは、子どもの絵に「自由な表現」を発見したことで、それまでの絵画様式や写実の束縛から解放されていったと考えられる。他にも子どもの絵からインスピレーションを得たとされるパウル・クレーやジョアン・ミロといった19世紀から20世紀に活躍した画家がいる。彼らが証明するように、子どもの絵にはその時期にしか描くことのできない魅力的な表現があることを忘れてはいけない。

本研究の実践からもいえるように、子どもの造形活動は、作品などの成果物だけではなく、その活動過程に重要な意味がある。もし、作品を完成させることを活動の目的とすれば、十分な素材体験と心を動かす経験はできないだろう。幼児期に特有の造形表現とは、手で作ることだけではなく感性を豊かに育むことで可能になるのである。

本稿は、子どもの遊びを豊かに広げるための造形素材としての粘土に注目し、2つの造形活動を実施した。その活動に共通することは、粘土素材を試す行為が遊びを生み出し、その遊びの中で生じる喜びや驚きといった心情が、次の活動への意欲を引き出していたということである。そして、心で感じたことを手を通して外に表すことが子どもの造形表現であった。このことを周囲

の大人（指導者）が認識した上で、子どもの活動環境を整えることが求められている。

本研究は、平成25年度岐阜聖徳学園大学短期大学部研究助成金を受けて行われたものである。

謝辞

本研究の実施において、ご協力いただいたA保育園、B幼稚園の先生方、また、造形活動に参加した子どもたちとその保護者の皆様に感謝申し上げます。

参考文献

- 1) 大場牧夫：表現原論 幼児の「あらわし」と領域「表現」. 萌文書林, 40, 1996.
- 2) 齋藤正人：造形素材を中心とした子どもの表現. 岐阜聖徳学園大学短期大学部紀要, 第46集, 2014.
- 3) 中川織江：粘土遊びの心理学. 風間書房, 67, 2005.
- 4) 中川織江：粘土造形の心理学・行動学的研究. 風間書房, 34, 2001.
- 5) 飯田善國：ピカソ. 岩波書店, 282, 2000.
- 6) 磯部錦司：プロジェクト・アプローチの実践から 保育のなかのアート. 小学館, 2015.
- 7) 愛知県児童総合センター：平成23年度愛知県児童総合センター年報. 2013.
- 8) ブルーノ・ムナリー, 小山清男（訳）：芸術としてのデザイン. 芳文社, 2006.
- 9) 中川素子：絵本学講座4 絵本ワークショップ. 朝倉書店, 2014.
- 10) 小川博久：遊び保育論. 萌文書林, 2013.
- 11) 乾孝：子どもたちと芸術をめぐって. いかだ社, 1977.

